

<研究ノート> 日本美術商ティコティンと、海を渡った表具師・原順造：戦前オランダ・ハーグにおける活動記録

著者	堀 咲子
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	18
ページ	65-96
発行年	2021-02-26
URL	http://doi.org/10.15002/00023761

〈研究ノート〉

日本美術商ティコティンと、 海を渡った表具師・原順造 —戦前オランダ・ハーグにおける活動記録—

堀 咲 子

1 はじめに

フェリックス・ティコティン（Felix Tikotin, 1893-1986）は、その生涯を通して日本美術と関わった美術商であり、彼の活動期間は、ドレスデン期、ベルリン期、戦前オランダ期、戦後オランダ期、イスラエル期と晩年の5期に区切ることができる¹⁾。本稿は、ティコティンの戦前オランダ期の後半に焦点をあてたものである。

ティコティンは当時のプロイセン王国グログアウ（Glogau）—現ポーランド共和国グウォグフ（Głogów）で7人兄弟の4人目として生まれ、幼少期を過ごした後、父親の事業の都合で当時のザクセン王国（現ドイツ連邦共和国ザクセン州）ドレスデンへ移った。子供の頃は芸術家を夢見ていたが、両親の反対を受け、大学では建築学を修めた。第一次大戦では兄弟と共にドイツ軍から徴兵され、長兄を失っている²⁾。

第一次大戦後、本格的に美術商としての活動を始める³⁾。1927年4月、ベルリン初の純日本式の工芸品店を開き、そこで最初の日本コレクション展を開催した⁴⁾。1930年春には在独日本大使館の紹介状を得て日本へ赴き、商工会議所他の協力を得て日本コレクションの仕入れルートを確立させ⁵⁾、欧州各地で自らのコレクションによる日本美術展を行った⁶⁾。やがてオランダのアムステルダムに移り、1937年にはハーグに居を構え、自宅にアートギャラリーを建設する。そのギャラリーには、自らが日本から呼び寄せた一人の日本人

がいた。

本論では、先ず、ティコティンと、彼が呼び寄せた日本人青年が戦前ハーグで活動していた期間を検証し、次に、二人が活動していた当時の現地報道記録をまとめる。最終的に、オランダの報道から見るティコティンアートギャラリーを通した日本観を考察し、彼等の活動の功績について明らかにする。

なお、ユダヤ系であったティコティンと彼の日本コレクションが時代背景から受けた影響等については、本論のなかで最終的な結論を出すものではなく、引き続き関連テーマの研究にて考察を重ねた上で総括の機会を待ちたい。

2 フェリックス・ティコティンと原順造

2.1 ティコティンの戦前ハーグ滞在期間

ティコティンがハーグに拠点を移したのは、ハーグ資料館で確認できる住民票の記載から1937年9月22日である⁷⁾。自宅ギャラリーを中心とした展示に関する報道は同年10月26日に始まり、1941年1月15日を最後に途絶えている。以降、確実に美術商ティコティンと判断できる報道は1947年4月18日まで見当たらない。なお、この空白期間中もオランダ各紙資料は現存するため、戦災によって新聞資料が紛失しているわけではない⁸⁾。

一方、1937年頃から終戦直後にかけては、ナチス政策により自宅のあったドイツを追われてハーグでティコティンと一時同居していた姪の証言が残されている⁹⁾。姪によれば、1940年5月14日の「真っ赤な空（オランダ軍による赤い煙幕）、そこに飛来してきたナチス空軍、パニックになった母」を覚えているという¹⁰⁾。ロッテルダム爆撃後、「48時間で荷物をまとめ、ハーグを離れて内陸に移動」し、「アムステルダム近郊へ一時避難した後、私と両親と叔父の一人はBussum（アムステルダム南東15kmにある町）に移動した」とあるが、「もう一人の叔父は、どこか別の場所へ避難した」とされる¹¹⁾。後者が美術商ティコティンである。ハーグで生活していたティコティンの親族はロッテルダム爆撃直後にハーグを離れ、以後、二度と戻らなかった。報道を見ると、その後もハーグの自宅ギャラリー展示の告知が更新されており、ティコティンは再びハーグに戻っていたことがわかる。同年11月11日付のDe Rijnbode

紙には、オランダ南部に位置する町、アルフェン・アーン・デン・レイン (Alphen aan den Rijn) の新規入植者欄に、「ハーグのNassauplein 6から移ってきた」ティコティン夫妻の名前がある¹²⁾。

1942年1月20日、ヴァンゼー会議で「ユダヤ人問題の最終的解決」が可決され、欧州全土でユダヤ人狩りが益々激化する。同年夏、ティコティン宛にヴェステルボルク通過収容所への輸送決定ならびに出頭命令の通知が発行されているが¹³⁾、これが送付された時点で彼は既に潜伏していた。また、Rijnland Printing company の貸倉庫の領収書が残されており、1942年から1945年までの保管料として400ギルダーを支払っていたことが確認されている¹⁴⁾。ティコティンの姪によれば、1942年に「両親はヴェステルボルク通過収容所に送られた」が、「それ以前に、二人の叔父はオランダ人の協力の元、既に潜伏していた」という¹⁵⁾。また、ティコティンの娘は、潜伏先に連れて行かれた日について、「(自分たち姉妹が) 父の運転するトラックに乗せられ、協力者であるオランダ人家族の農場へ連れて行かれた」と証言しているが、その日のうちにティコティンはどこかへ去って行ったという¹⁶⁾。娘によれば、母親、つまりティコティンの妻はその後も定期的に娘の潜伏先を訪れており、妻はおそらく夫の所在を知っていたとされるが、これ以降、ティコティンの具体的な動向はオランダ解放まで不明である。

以上のことから、本論では、ティコティンがハーグに拠点を移した1937年9月下旬から最後の自宅ギャラリー展示まで、すなわち1940年10月上旬までの約3年間を「ティコティンの戦前ハーグ滞在期間」とする。

2.2 原順造と渡蘭

原順造 (Junzo Hara, 1913-1968) は、当時の東京府芝区 (現・東京都港区) で5人兄弟の長男として生まれた¹⁷⁾。父親の原清曠は、徳川家康に従って江戸入りした表具師・福田鉄五郎 (通称経鉄) の子孫・福田繁二郎の門下生であった堀雄太郎の弟子である¹⁸⁾。清曠の弟子の一人に、日本で初めて額装を試みた岡村辰雄 (1904-1997) がいる。岡村によれば、順造は尋常小学校・旧制中学ともに学業成績は首席であったといい、芝中学での担任教師が、後に陶芸家となる秦秀雄 (1898-1980) である。秀才で向学心の強い順造を惜しんだ秦は、

順造を進学させるべく清曠に説得を試みたが、清曠は長男である順造が家業を継ぐことを望んでいた。清曠は、秦の厚意には深謝しながらも、「これは学資の問題ではなく、仕事を体得するに大切な若い時機を失うことを恐れるから」であるとして、受け入れなかった¹⁹⁾。

芝中学を退学させられた順造は父親の弟子の所へ丁稚奉公に出され、睡眠と食事以外はひたすら仕事、という厳しい表具修業の日々を送っていたが、「いずれは外国へ行きたい」という想いが常にあった。そんな彼を見守っていた秦の口添えもあり、1934年、21歳になった順造は、衆議院議員・河上丈太郎の夫人が経営する愛宕英語学校の夜学に通い始めた。この時、「本当は外交官になって世界へ出ていきかった」という想いを河上夫人に告げている²⁰⁾。

その約2年後、1936年2月9日の加州毎日新聞では、「青年表具師・原順造は、日本美術の真価を世界に知らしめるため英国か米国での活躍を夢見ている」と報ぜられており、同年2月7日の日米新聞にも、「東京で英語を話せる唯一の表具師・弱冠24歳の原順造は米国を目指している」という記事がある²¹⁾。これら両記事は、はたして順造本人が新聞社に自分を売り込んだのか、あるいは彼の想いを知っていた周囲の働きかけがあって記事にされたのかは定かではない。いずれにせよ、暗にスカウトを期待していると感じさせる記事であり、外国で活躍したいという順造青年の強い想いが表れている。

翌年春、ティコティン夫妻が来日した²²⁾。その際、当時の東京市麹町区（現・永田町）にあった会員制高級料亭・星ヶ丘茶寮で原清曠と会合し、通訳として順造が紹介された²³⁾。

矢代幸雄によれば、この時、ティコティンは日本美術品を修繕できる職人

【写真1】「英語を話せる唯一の表具師」の紹介記事

Paper-hanger Speaks English; Only Youth In Tokio Discovered

TOKYO MAIL, Feb. 8.—Mr. Junzo Hara, 24 years of age, is perhaps the only paper-hanger in Tokyo who can speak English.

He lives at Kotohiracho in Shiba, and as he considered it the duty of Japanese paper-hangers to make known the essentials of Japanese art to the world, he began the study of English, and can now converse with his customers.

His ambition is to go to England or America and make known the value of Japanese art.

『加州毎日新聞』[Japan-California Daily News] 1936年2月9日、8面

をオランダへ呼ぶべく、適材を探していたという。なお、星ヶ丘茶寮の支配人は秦秀雄である。彼らは如何なる経緯で接点を持ったのか。当時の新聞記事では順造が夫妻を各地へ案内して回ったことが紹介されており、夫妻が『『英語の出来る表具師さん』の親切に喜んだ』とある²⁴⁾。或いは、アメリカ経由で訪日したティコティンは、加州毎日新聞の記事を見て順造を尋ねてきたのかもしれない。

順造を大いに気に入ったティコティンは、同年中にオランダの入国許可証を添えた招聘状を送った。これを受けた順造の返信には、「私が欧州へ行けるというのは本当なのか。ならば、貴殿の期待に応えるべく英語もドイツ語も猛勉強し、美術関係についても学んでおく。」という、やる気に満ちた喜びが綴られている。

1938年1月発行の『博物館研究』では、「青年表具師の渡欧」と題して順造のオランダ行きが取り上げられ、「(順造は)該地に渡っている軸物の整理補修のために働くこととなった。邦人ならではの出来ぬ新しい仕事としても注目される」と紹介されている²⁵⁾。同年3月31日、白山丸で日本を発った順造は、英国経由で5月末にオランダ入りした²⁶⁾。

1939年8月23日、独ソ不可侵条約締結により開戦が不可避となり、在欧邦人に帰国命令が発せられた。同年9月2日付で当時の在ベルギー日本領事が

【写真2】 日本滞在を終えて出港するティコティン夫妻。左端が原順造。



1937年撮影。United States Holocaust Memorial Museum, courtesy of Ilana Drukker [=ティコティン夫妻の長女]

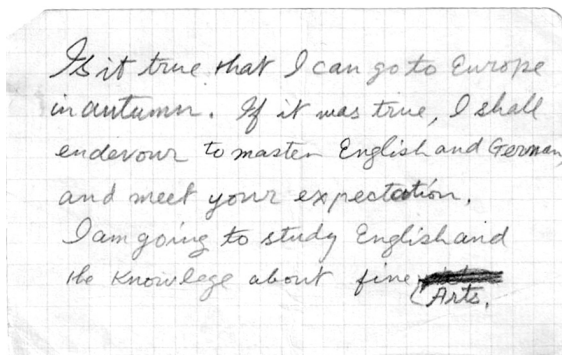
発した電信では、9月1日にアントワープ港から栗田丸²⁷⁾が出航し「表具師原順造ほか5名が避難帰朝」したことが報告されている²⁸⁾。

【写真3】 渡蘭する原順造の紹介記事。この切り抜きは、1938年に順造がハーグに持参したものである。左端は順造に英語を教えていた河上末子。下のティコティン夫妻は、前掲の【写真2】がカットされたものと判る。



Jaron Borensztajn 氏による提供

【写真4】 1937年夏頃、招聘状を受けた順造からティコティンに送られた返信



Jaron Borensztajn 氏による提供

以上のことから、原順造がハーグに滞在したのは、住民登録が行われた日付の1938年5月30日から、帰朝の際に乗船した粟田丸がアントワープ港を出航した1939年9月1日までの、ちょうど一年三ヶ月間であった。

3 ティコティンの戦前ハーグ滞在期間における報道記録

3.1 ティコティンアートギャラリーを中心とした日本美術展

ハーグの自宅(Nassauplein 6)ギャラリー展示に関する報道は1937年10月26日に始まり、1940年10月4日までに16回の展示が開催された。評論によると、ティコティンが作り上げたギャラリーの雰囲気は、訪れた人々を東洋美術の世界に惹き込んでいったという²⁹⁾。

報道は、当時のカトリック系日刊紙で最大手のDe Maasbodeと、当時の文芸批評の指針となっていた日刊紙Het Vaderland: staat -en letterkundig nieuwsbladの二紙において高頻度で見受けられる。その他、地方紙でも定期的に告知や広告が出され、また特集記事も掲載されている。これらオランダ紙報道一覧は資料として末尾に掲載した。

以下、表1は開催された展示一覧である(太枠内は原順造のハーグ滞在期間)。これら展示のカタログや出品リストは見つかっていないが、表2では、評論から作品／文献が特定できるものを《 》／『 』で明記し、特定できないものは「 」で記事中の解説を掲載した。

なお、展示B、D、G、Oの評論は見当たらない。展示Dの直前には同じテーマによる日本美術展が当時のハーグ市博物館(Haags Gemeentemuseum／現・デンハーグ美術館)で行われており、このカタログを見ると、全355点のうちティコティンコレクションから鈴木晴信、歌川国芳、写楽、歌麿、北斎など121点が出品されている³⁰⁾。これらから展示D、Iにも出品されたものがあると推察するが、このハーグ市博物館の日本美術展とカタログに関する考察は別の機会に取り上げたい。

報道で一貫して見受けられるのは、先ず開催日前に独立した見出しで告知が為され、続いて開催期間を通して、美術展広告一覧に日々掲載されるという流れである。さらに、12回の展示について開催期間中に評論が出されてい

表1 ティコティンアートギャラリー開催展示一覧

展示名	開催期間
A 葛飾北斎 / Penseelteekeningen en kleurhoutsneden door Hokoesai	1937. 11/9-30
B 竹内栖鳳による掛物 / kakemono's door den schilder Seiho Takenouchi	1937. 12/14-31
C 相阿弥・森狙仙・狩野芳崖ほか名匠による掛物 eenige kakemono's van Soami, Mori Sosen, Kano Hogai e.a. klassieke meesters	1938. 1/11-21
D 名匠による絵画と浮世絵版画 schilderijen en teekeningen van meesters en houtsneden van de Ukiyo-E-School	1938. 1/25-2/25
E 日本庭園と生け花 / Japansche Tuinkunst en Bloemschikking	1938. 3/1-5
F 絵暦 / Japansche kalenderbladen (Egoyomi)	1938. 5/18-6/17
G 新入荷：日本画・木版画 / een tentoonstelling gehouden van nieuwe aanwinsten Japansche schilderijen en houtsneden	1938. 6/28-7/15
H 日本美術のなかのオランダ人ほか欧州人 Nederlanders en andere Europeanen in de Japansche kunst	1938. 8/31-9/30
I 歌川国芳 / Japansche prenten door Utagawa Kuniyoshi	1938. 10/25-11/25
J 根付と屏風 / Netsoekés en Japansche wandschermen	1939. 4/25-6/15
K 現代中国画家 齊白石 / tentoonstelling Ch'i-Pai-Shih	1939. 8/1-9/1
L 河鍋曉斎 / Expositie Kawanabe Kiosai	1939. 9/29-11/3
M 日本の生地・染物・刺繍 / Japansche weefsels, bedrukte en geborduurde	1939. 11/21-12/29
N 和書・和紙 / Japansch papier en Japansche boeken	1940. 3/1 まで
O 日本の陶磁器・茶器 / Japansche ceramiek, waaronder aardewerk voor de theeceremonie	1940. 4/11-6/7
P 古典期後期中国と日本の絵画 / laat-klassieke Chineesche en Japansche schilderkunst	1940. 9/6-10/4

る。ギャラリーは毎週火曜から金曜の10時から17時まで、あるいは13時から17時まで閉館された。また、ハーグ滞在期間を通してオランダ各地の日本美術展にもコレクションを提供していたことがわかる。

1938年10月から11月末にかけて開催された歌川国芳展は、De Maasbode紙の告知で「オランダ初の大規模な国芳展」と報ぜられた³¹⁾。

国芳展の後、翌年4月22日までの約5ヵ月間、ギャラリーに関する報道が途絶えている。この時期のティコティンの姪の回想を見ると、1937年にはドイツ国内のユダヤ人子弟が公立校に通えなくなり、一家は徐々に追い詰められていたが、1938年11月9日の「水晶の夜」を発端にユダヤ人迫害は激化した。姪によれば、「父はブーヘンヴァルト強制収容所に連行されたが、恐らくオラ

表2 報道で言及されたティコティンアートギャラリー展示品一覧

	展示品として言及されているもの
A	《龍図》《諸国滝廻り》《日新除魔図》《富嶽三十六景》：山下白雨・凱風快晴・神奈川沖浪裏
C	土佐光貞による三部作「春・夏・秋の景観」／狩野芳崖「美しい樹（1800年頃）」／雲溪永怡「想像力豊かな森の景観（1535年頃）」／森祖仙「モノクロの繊細で活気に満ちた鹿」
E	柴田是真「牡丹の水墨画」／接木小刀、花鋏ほか華道具／流木花瓶／生け花作品
F	北斎、春信ほかによるカラー絵巻：長短交互の葎の中にいる兎／牛乳を飲む蛇と踊る蛙たち（身長が高低二種の、腹を向けた蛙と背を向けた蛙）／閑節毎に文字や印が書かれた伊勢海老と鼠
H	司馬江漢《犬と召使のいるオランダ商館長ヘンドリック・ドーフ》／ポルトガル装飾の印籠／動物を抱えた西洋人の根付／河鍋曉斎《福助のかるわざ》 ³²⁾ ／歌麿の作品（詳細不明）
I	《源頼光公館土蜘蛛妖怪図》《相馬の古内裏》
J	根付：円形に繋がった二頭の馬／一匹が背中に乗った大小二匹の蛙／着物を着た立姿の狐／花屏風：狩野元信？「モノクロ二曲、五羽の雁」（本来は推定六曲、展示品は残欠の二曲のみ）／俵屋宗達「カラー二曲、豊富な色彩、対角線上に二人の人物」／「雉と松、背景は金色」
K	「向かい合った二羽の黒い鳥（記事中に写真・斉白石の印章“老萍”あり）」「蓮の花が浮かぶ池と二羽の家鴨」「大きな葉・花と鳥」「生い茂る葡萄（ほのかに色付けされている）」とリス「上部に鳥、下部に虫：鳥は斉白石画、虫は王雲（WANG Yun, 1888-1934）画」
L	《蒙古賊船退治之図》《天竺渡来大評判 象之戯遊》《盲人百態図巻》《応需曉斎楽画第一号 地獄の文明開化》／扇絵：「表情豊かな黒い猛禽」／大型掛物：「雪に覆われた松に留まる二頭の猛禽」／「曉斎画談」：「骨格と生体モデルが同じ位置に描かれている」ほか版本数冊
M	18世紀の着物生地（額入）／僧侶の袈裟：絹地、きめ細かな金箔糸使用／ドイツ人画家ライブル（Wilhelm Leibl, 1844-1900）コレクション：17世紀の能楽用装束／子供用着物：深川鼠の地に葎
N	ギャラリー壁に多種多様な和紙：美濃紙、書道紙、印刷紙、二枚重ね、ほか多数／白・金・銀などの包装用和紙紐／「宋紫石画譜」／「光琳画譜」／歌麿《青楼十二時》のうち2点
P	複製：《絵師草紙》／覚猷《鳥獣人物戯画》／雪舟《四季山水図巻》 原画：宮本武蔵「武蔵と二羽の鶉の墨絵」／茶碗：尾形光琳画／馬遠《寒江独釣図》／茶掛

ンダにいる叔父の協力で当該地の移住許可証を取得していたため釈放された。ドイツの財産は全て没収され…（中略）…12月には私が両親に先立ってオランダへ向かった」³³⁾という。なお、オランダ政府は同年12月15日にドイツとの国境を封鎖しているため、少なくとも12月15日以前にはティコティンの兄一家全員がオランダに入国していたと思われる。その後は、「ハーグで美術商をしている叔父を頼って、翌年1月には両親もハーグに移った…（中略）…叔父の広くて大きな家に、両親と共に滞在した。」³⁴⁾とされている。

一方、原順造のハーグ住民票を見ると、渡蘭当初はティコティンの自宅（Nassauplein 6）に居住しているが、1938年12月6日付で近隣のアパートに転居している³⁵⁾。恐らく、1938年末から翌年春にかけて、ティコティンはド

イツで窮状に陥った兄一家をハーグに呼び寄せ、彼らの生活基盤を整えるため奔走していたのであろうことが推察できる。その後、兄一家は近隣に引越³⁶⁾し、ギャラリーでの展示は1939年4月25日から再開した。

戦前ハーグ期におけるティコティンの業績の一つに、1938年7月に大塚巧藝社から出版された和綴じカラー図版『桃山花見屏風』がある³⁷⁾。1939年7月7日の *Algemeen Handelsblad* 紙ではこの図版について言及されている。

1940年5月のナチスによるオランダ侵攻後、ギャラリーの展示は再び途絶え、最後の展示は同年9月6日から10月5日にかけての「古典期後期中国と日本の絵画」であった。前述の通り、ティコティン夫妻は1940年11月中にハーグを離れて別の町に移っている。同年には、オランダ北東部に現在に亘って存続する芸術協会 *Pictura* にて、ティコティン日本コレクションによる展覧会が二度開催されている。2月18日から3月3日の開催では印籠や茶道具が出展され、11月17日から12月1日の開催では、大塚巧藝新社の巻物・掛物（複製）と小物美術品（石、青銅、木工）が出展された³⁸⁾。

終戦前にティコティンの名が確認できる最後の報道は、1940年12月18日にユトレヒトで開催された「中国・日本古美術展ガイドツアー」予告である³⁹⁾。記事によれば、18日午後2時半より、コレクションの所有者であるティコティン自らが見所を解説するという。この展示は、1940年12月16日から1941年1月15日まで *Kunstliefde* にて開催された。

3.2 生け花と茶会の実践

ギャラリーで初めて生け花が披露されたのは、1938年3月1日から同5日にかけての「日本庭園と生け花」展である。同展では、接木小刀や花鋏などの華道具、流木の花瓶も並べられ、壁には柴田是真（1807-1891）による牡丹の水墨画が掛けられた。評論では、「会場は多くの来場者で込み合っており、花瓶の花が芸術作品だと気付くのは難しいかもしれないが、来場者に日本観の一端を与えるものとなろう。」と紹介されている。さらに、より深い理解のために、ドイツ文学者・鼓常良の著書：*Die Kunst Japans*, Insel-Verlag, Leipzig 1929. の最初の三章（庭園、盆栽、生け花）が推奨されている。

原順造は、現地での日本文化実践も想定していたティコティンの要請に

より、渡蘭前に茶道と生け花の稽古を受けていた⁴⁰⁾。1938年10月24日のHaarlem's Dagblad 紙には、生け花と順造についての特集記事がある。以下、全文邦訳と記事中の写真を掲載する。

【特集・花】—花瓶を成す日本の芸術—

オランダの主婦が庭や花屋から花を手にして花瓶に挿すのは、実に単純だ。茎を揃えて切り、それらを束ねてサッと花瓶に入れば完成である。

現在、日本人の原氏は、生け花制作の真っ最中である。原氏の作品は、フランス・ハルス美術館で開催中の日本版画展にて展示中だ。

日出づる国では、主婦が花瓶に花を挿すのに少し時間を要する。時に、一つの花の完成に一時間かけることさえある。それほど時間をかけて、いったい花はどんな変身を遂げるのだろうか。現実的思考のオランダ人が想像したところで、せいぜい花の茎が短くなって、鋏の刃が少し薄くなることしか思いつかない。そんなに時間をかけることなどないだろう。ところが、どっこい。

フランス・ハルスの日本版画展では、独特な花瓶の数々も展示されている。うち一つは御伽の国の船のようだ。それらの花瓶に相応しく、花々が日本式に活けられている。ハーグ在住の原氏は、日本では女性の慣わしである、この生け花を習得している。今回の日本版画展のため、原氏は生け花の形をいくつか披露した。

生け花制作中の原氏を見ていると、まるで花の静物画に取り組んでいる画家のようでもあるが、実際、両者には類似点がある。

日本人にとって、生け花とは詩を書くことと同義であり、花々と花瓶の構成にあたっては、作詩と同様、特定の規則に従って制作者の意向が表現される。それは、2つの花だけで構成される場合もある。それぞれが同じくらいの高さに配置され、一方は悲しげに垂れ下がり、他方は上向きに茎が曲げられて蔓が絡み合っている。これは何らかの表現なのだ。では、何を言わんとしているのか。然り、日本語を母語とする原氏から、沈黙を守る東洋芸術の秘密を暴くことはできない。我々欧州人がそれを知りたいなら、日本で生け花に取り掛かる日本人と同様に彼等の言語を根気良く学ぶべきなのだ。生け花に取り組む原氏は、絵画と同様、花瓶に近付いたり遠く離れたりして、上から下から、目を細めて確認している（日本人は常に目を細めているかのようだが、彼を

注意深く観察していれば違いは明らかである)。

我々は、真剣な眼差しで作られていく生け花に惹き込まれた。最終的に葉は落とされ、茎は台座の上で曲げられたが、それらは単純な工程でなく、多くの熟考を経た末の完成形であった。花は当然、オランダのものであるが、原氏はハーレルムの花屋から故郷の花のイメージに最も適合するものを選び、そして見事に成し遂げたのである。もちろん色彩も彼の構想の一部で、花瓶の形は各々の作品の雰囲気によく合っている。

この芸術が広く行われている日本において、家庭主婦は一人一人が詩人なのである。

日本人は、花で表現し伝える。彼らは、オランダに伝わる諺の、より高度な演出を持ち合わせているのである — „Zeg het met bloemen” (花で想いを紡ぐ)⁴¹⁾

以上のように、報道ではその生け花作品のみならず、生け花に取り組む順造の姿も絶賛されている。仕事柄、日頃より貴重な美術品の数々を扱っていた順造は、日本美術の形式や配色の考案に際しての感覚も持ち合わせていたのである。

1938年11月2日のDe Maasbode紙では、翌日午後2時半、フランス・ハルス美術館の日本美術展にて、「原氏」が新しい生け花を披露することが報ぜられ、同日夕方には、日本美術協会主催で「原氏」による茶会が行われるとある⁴²⁾。

また、同年11月19日のDe Maasbode紙によると、11月20日から12月

【写真5】 現地で生け花に取り組む原順造



De Japanner Hara bezig met het schikken van bloemen in vazen volgens Japansche opvatting. De vazen staan op de tentoonstelling van Japansche prentkunst in het Frans Hals Museum.

Haarlem's Dagblad, 24. 10. 1938, p.3.

11日にかけてロッテルダム美術館で開催されたティコティン日本コレクション展（掛物と調理器具）では、毎週水曜日の午後には生け花が披露されたという。ここで生け花を実践した人物については記録が見当たらないが、おそらく、これも順造によるものだったのではないかと推察される。

順造の帰国直後、1939年10月26日の読売新聞では、「オランダから帰った原氏の話」として、順造の見てきた現地の様々な様子が紹介されている。その中で、生け花と茶道については「非常に珍しがり、各地で大歓迎だった」こと、「面白かったのは、日本のお茶が苦いので、折角たててもなかなか飲まなかった」こと、それに対して、「これは薬になるからと言って飲ませた」こと、そして、オランダ婦人が、日本人のように音を立てて飲むことを下品であると言って絶対に音を立てなかったこと等が回想されている⁴³⁾。

【写真6】 原順造による生け花と茶会の開催告知



De Maasbode: Avondblad, Tweede blad, 02. 11. 1938, p.6.

【写真7】 ロッテルダム美術館での生け花開催告知



De Maasbode: Avondblad, Tweede blad, 19. 11. 1938, p.6.

4 ティコティンアートギャラリーを通して見る日本美術

4.1 評論における日本美術考察

1937年の訪日中、ティコティンは重要な書籍やサンプルと共に、当時の小道具から家庭用品まで膨大な量を購入した⁴⁴⁾。船便でオランダに送付した荷物は梱包に一週間を要し、27箱に及んだという。ハーグのギャラリーにおける全16回の展示（A～P）で出品されたことがわかっているものは前掲の表

2でまとめた。それを、内容の上で、絵画、浮世絵、工芸、その他に分類したものが以下の表3である。なお、複数のジャンルから出品されている場合もある。

表3 ティコティンアートギャラリー展示品 分類別一覧

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	計
絵画		○	○	○	○		○	○				○				○	8
浮世絵	○			○			○	○	○			○					6
工芸						○		○		○			○	○	○		6
その他					○									○			2

注) 浮世絵の前身である絵暦 = F は工芸に分類した。K は中国美術のため考察の対象外。

この分類によって明らかなことは、評論から言葉を借りれば、いわゆる純粋美術（原文：vrije kunsten）である絵画が中心的となった展示はB、C、Pの3回であり、絵画と他との混合展示はD、E、G、H、Lの5回である。Kを除く15回のうち8回はいわゆる応用美術（原文：toegepaste kunst）中心で、日本人の実生活と密着したものが多岐にわたり紹介された。

評論のうち、日本人と美術に対する見解に共通して見出せる特徴は以下のとおりである。

欧州では、美術と生活は多かれ少なかれ独立した別の概念であるが、日本において、美術は日常と分離され独立した創造物として存在するのではなく、日常の一部として継続的に存在する。日本では純粋美術と応用美術の区別がなく両者は独立していない。一方が他方なしには存在し得ず、あるいは、少なくとも他方との繋がりがなくては成立しない。また、あらゆる生活活動が様式化され、日常のなかで美術活動が一貫して実施され活かされているという点で、生活と美術の境界が欧州とは異なっている。

これらの具体例として、生け花や工芸の各テーマが挙げられている。とりわけ、絵暦の評論によれば、後の浮世絵の元となった絵暦が当時の欧州で展示されることは珍しく、また絵暦は日本版画の研究において重要な要素となるにもかかわらず文献資料も存在しなかったという。江戸幕府によって暦師以外

が作成した暦の売買が禁じられていた当時、絵師によって主に贈答品として作成されていた絵暦からは日本人のユーモアのセンスが見て取れる。ティコティンが実際に展示したものでは、蛇が描かれている絵は巳年であり、さらに、高低二種の腹を向けた蛙と背を向けた蛙の謎解きによって当時の日本で使用されていた太陰太陽暦の月の大小や行事がわかる。他の絵でも同様の謎解きで暦がわかる仕組みになっており、単なる日本美術品の一つとしてのみならず、「暦の作成」にならないように、謎解きによって暦となる絵の制作を試みる日本人の創意工夫を知ることができ、二重に興味深いものと評されている。

次に、日本の絵画に対する見解は、14世紀のルネサンス期から続く西洋美術の画法との比較考察が顕著であり、共通する特徴は以下のとおりである。

日本の絵画は、自然界から直接的に描かれたものではない。日本の絵師は、もちろん風景も写實的に描かれた人物や動物も写生してはいたが、日本ではそのような絵に価値が置かれておらず、実際の美術作品は記憶と想像力による産物である。日本の絵画は、筆力（原文：„Hitsuryoku”）により、最も激しい感情も繊細な感情も絵師の心の赴くままに表現され、眼と手の間を調整するものは介在しない。

具体例として、北斎、雲溪永怡による森の景観、森祖仙の鹿、絵暦、歌川国芳、河鍋曉斎、覚猷の《鳥獣人物戯画》、宮本武蔵が挙げられている。

ティコティンの独創性が最も顕著な展示は「日本美術のなかのオランダ人ほか欧州人」である。評論では、同展は「日本人の視点による欧州と日本の対比」とされ、作品を通して異文化の眼差しに映る己を知ることのできる貴重な機会である旨、好意的に紹介されている。展示されたものの多くは比較的近年の名もなき絵師の作品とされる。彼らの眼に映った「赤毛の珍奇な生き物」の観察記録では、「文化人」である日本人は真っ直ぐな黒髪を携えており、類型化された「奇怪な赤毛」が身に纏っているものの詳細や、葉巻を銜えている姿、仲間と腕を組んでいる姿、座って食事をする姿など、一挙一動が純粋な好奇心をもって率直に描かれている。展示品には、歌麿や司馬江漢のように欧州人を好意の眼差しで描いた作品もあるが、それらは稀有な例外である。また、ドゥーフ肖像画に見られるように、版画でも肉筆画でも欧州人の召使として描かれているのはいずれも中国人か蘭印の現地人であることから、日本人が考える

己の立ち位置を窺い知ることができる。加えて、河鍋暁斎による《福助のかるわざ》では当時の日米関係がユーモアで表現されている。構図は、左側の「アンクル・サム」と右側の保守的な日本人が睨み合い、両者の長く伸びた顎鬚が中央で結ばれ、その髭の上では鈴と扇子を持った和装の人物が神楽を舞っているというもので、両者の間で張った髭のような緊張感がありつつも日本人は完全に愛想を尽かしてはいない様子が絶妙に描かれている。

4.2 原順造が日本美術イメージに与えた影響

矢代幸雄によれば、戦前、海外からの日本人表具師の招聘は予算の都合で難しく、少なくとも戦前の欧州では原順造の他に一人もいなかったとされる⁴⁵⁾。そのため、当時の欧米各国では日本の掛物や屏風はかなり多量に出回っていたが、「それ等は紙がはがれたり表具が破れたりして、実に惨憺たる状態になっているのが普通」であったという⁴⁶⁾。

一方で、ティコティンが各々の美術品を入手した時点での状態は知ることができず、同時に順造は、その職業柄、自分が修繕あるいは表装した美術品にその名を残していない⁴⁷⁾。ただ、いくつかの資料では、ティコティンは美術品の修繕や保管に対して関心はあるものの、独自のこだわりが強く、決して正しい扱いはしていなかったという評価もある⁴⁸⁾。つまり、日本美術品修繕の専門家ではないティコティン一人では、所有する美術品の状態を良好に維持したり、美術品保存の観点で扱ったりすることは難しかったと言えよう。それゆえ、ティコティンアートギャラリーの展示は、順造が着任してから後、彼が手をかけたことで良好状態の日本美術品が並んだと考えるのは自然ではないだろうか。

もちろん、順造の渡蘭以前からティコティンは日本美術展を開催しており、また、戦前オランダをはじめ欧州各地でも、日本人表具師なくして数多くの日本美術展が開催されている。では、順造がいなくとも、ティコティンアートギャラリー日本美術展は成り立ったのだろうか。

かつて、表具修行のため息子を丁稚奉公に送り出すにあたり、順造の父・清曠は次のように考えていた。

すべて職人の仕事には、それぞれ伝統があり、その伝統は国の風土の中

で永い歳月の間に培われたものであるから、これを一代で研究し工夫し発見して行くことは容易ではない。その点、徒弟制による修業は、たとえ期間は十年十五年であっても、その間に百年二百年と受け継がれて来た蓄積を師匠から弟子へと継承させ、行住坐臥、日常茶飯の生活の中で体得させることができる⁴⁹⁾。

【写真 8】 仕事場の原順造、ティコティン撮影



Tikotin - a life devoted to Japanese Art(film): 14:59 より

清曠の下で修行をした岡村辰雄は、当時の表具師が必ず行っていたこととして、まず糊煮を挙げている。この糊煮は生麩を一週間かけて煮込むもので、二人がかりで毎日うわ水を替えて灰汁を抜き、加熱して棒でかき回しながら練り上げていく、朝から夕方までの一日仕事だったという。また、掛軸の裏打ちでは、使用する紙の選別、煮立ての糊と古糊の配合具合、天候にも左右される糊の乾く速度の微調整など、習得に長い年月を要する技の具体例が挙げられている。加えて、屏風や掛軸の欠損部分を修繕するには絹や和紙の知識も必要で、一見同じに見えても各時代毎に微妙な違いがあり、修繕を長年手がけていなければ時代の推定はできないという。(ここでは余談になるが、順造の帰国後にティコティンのギャラリーで多種多様な生地や和紙が展示されたのは、順造が置いていったこれらの豊富なサンプルがあったためではないかと推察する。) さらに、修繕には幾種類かの「すす」も必要とされ、売品にはないすす集めとその精製も表具師の仕事である⁵⁰⁾。

これらは全て、書物を頼りに見様見真似でできるものではない。長年にわたる継承の流れで修行を積んだ者でなければ為せない業は、表具師のみならずあらゆる伝統技能に共通するだろう。この点は、邦人の就労許可取得が難関と言われる現在の欧州でも、日本特有の技能を持つ職人は特殊技能者として就労許可が下りやすいことから実証されている⁵¹⁾。つまり、現在でも、日

本ならではの技能を有する人材は EU 圏国籍保持者から容易に確保できないとの判断により、日本から職人が招聘されているのである。

以上のことから、戦前欧州において、日本美術品の修繕あるいは表装は、日本の表具店で約 10 年間修行を積んだ原順造唯一人にしか成し得なかった業であると言って良い。仮に、順造が存在しなかった場合のティコティンアートギャラリーが如何なる有様だったかを想像するなら、矢代の言う、当時の欧州における一般的な日本美術展と同様、「紙がはがれたり表具が破れたりして、実に惨憺たる状態」の日本コレクションが並んでいたことだろう。ゆえに、ティコティンアートギャラリーは、原順造によって、欧州において前例を見ない良好な状態の日本美術品の展示が実現したと言える。

順造のハーグ滞在最後の一ヵ月間で開催された斉白石展についても特筆すべき点がある。同展の評論から、作品は掛物として展示されていたことがわかる。一方、当時の中華民国（現・中華人民共和国）国内の斉白石の作品取引に関する記録を見ると、作品は常に掛物の状態で売られたわけではなく、表装の有無も含めて購入者の希望・予算に合わせて制作されていた⁵²⁾。もちろん、ティコティンが斉白石コレクションを入手した時点ですべてが表装済だったのかは確認できないが、これらも、展示に向けて順造が掛物に仕立てたと考えられるのではないかと。

なお、晩年のティコティンは、ハーグでの順造を以下のように賛美している⁵³⁾。

彼は、間違いなく、日本の伝統工芸を日本国外に出て実践した最初の日本人の一人である。ハーグの私のところへやってきた彼のために、私は専用のアトリエを用意した。彼の造り上げたすべてのものは天下一品であり、その作業を傍らで見守ることは、私にとって至上の喜びであった。

ティコティンのニュアンスから、順造が一から表装を手がけたものは相当数に及ぶと読み取れる。

5 おわりに

本稿では、オランダ紙を中心とした報道記録を基に、親族の証言等も含め

て検討した。これにより、戦前ハーグにおけるティコティンと原順造の功績について明らかにし得たことは以下の通りである。

- 一、かつてハーグに存在したティコティンアートギャラリーが盛況で成功を収めたことには、美術商ティコティンの審美眼や企画・実行力もさることながら、彼の構想を支え、裏方に徹した日本人表具師・原順造の存在があった。
- 二、約3年間にわたって開催された多様なギャラリー展示を通して、日本において美術は日常と切り離された創造物としてでなく、日常の一部として人々の生活様式に根差しているという日本観の一端を与えた。また、ティコティン独自の企画展示である「日本美術のなかのオランダ人ほか欧州人」を通して、日本人の描いた欧州人の姿が新鮮な驚きを与え、欧州からの一方向的なオリエンタリズムによらない、双方の眼差しの交差が実現した。
- 三、原順造は、戦前のオランダで一日本人として日本文化流布のための活動にも携わっていた。特に生け花は、表具師として日本美術の形式や配色のセンスを心得ていた順造が行ったことで傑出した作品の数々が披露された。これにより、オランダの諺で言われるように、花で想いを表現し伝える文化を日本人も持ち合わせているという日本観の一端を与えた。

美術商ティコティンと、欧州初の日本人表具師・原順造により、アートギャラリーは軌道に乗ったかに見えた。しかし、在独ユダヤ人を窮地に追いやる発端となった「水晶の夜」の影響はティコティンにも及び、さらに、独ソ不可侵条約締結によって開戦が決定的となったため原順造は帰国を余儀なくされた。その後、ナチスによるオランダ侵攻を境にオランダ国内のユダヤ人も追い詰められ、ティコティンのハーグからの退避と同時に彼のギャラリーはその幕を閉じた。激動の時代にありながら、それを感じさせないほど精力的で充実した3年間であった。

戦後、1950年代後半、ティコティンは所有する日本コレクションを自らのルーツであるイスラエルに送り、ハイファ市内に自らの名を冠した日本美術館を建設した。そこには、かつてハーグで順造が制作した障子戸も設置された⁵⁴⁾。立ち上げにあたっては、館内での美術品修繕ワークショップの提供も

構想され、順造に声がかかった⁵⁵⁾。しかし、その当時既に病床にあり、医師から余命宣告を受けていた順造はこれを辞退している。その後もティコティンは訪日の度に順造の自宅を訪れ、床に臥す友人を見舞った。1968年、順造の葬儀にはティコティンも駆けつけ、故人に想いをはせ涙していたという⁵⁶⁾。

本稿で取りあげた戦前ハーグのアートギャラリーは、美術商ティコティンの活動の一部でしかない。ティコティンと日本美術については、冒頭で述べたとおり、戦前オランダ期以前、および戦後の活動についても検証すべき点が多い。一方、原順造は、ティコティンとの関わりでは戦前ハーグ期にのみ登場するため、ここで総括したい。

原順造の活躍は表具師の役割が注目される一つのきっかけとなった。戦後、順造の父である清曠は、ワシントン D.C. のフリーア美術館から表具師として招聘を受け⁵⁷⁾、また、宮内庁や国立博物館他からの依頼で数多の額装を施した岡村孝三郎（岡村多聞堂二代目）が欧州に渡って美術品修繕を修めたのには、母方の叔父である順造の影響もあつてのことだった⁵⁸⁾。加えて、かつて順造が数々の生け花を披露して大きな反響を呼んだ、オランダのフランス・ハルス美術館では、現在にわたってなお、各展示室や特定の作品の前には日常的に大きな花が生けられるという。これは決して、オランダの美術館ではよく見られる光景というものでもない。いったい如何なる由来でこのような習慣になったのか、美術館に問い合わせても具体的な理由は判明しなかった。あるいは、順造の活躍が遠因になっているのではないか。

順造からティコティンに送られた1952年8月26日付の手紙には、「貴方がた御家族と共に過ごしたハーグでの日々は、私の人生で最も輝いていた」と綴られている⁵⁹⁾。オランダに続くイスラエルでの活躍は叶わなかったが、世界を夢見た表具青年の手によって修繕あるいは表装された美術品の数々は、その後オランダとイスラエルに分散された⁶⁰⁾。今日も、それらは作品そのものの心と共に、人知れず日本の伝統工芸の真価を伝えている。

謝辞

原順造氏の御子息である原幹一様、Felix Tikotin 氏の御令孫である Jaron Borensztajn 様、秦秀雄氏の御子息である秦笑一様、河鍋曉斎記念美術館の河

鍋楠美館長、和光大学の松枝到教授、東京学芸大学の大森一三特任准教授、法政大学の徐玄九講師、文筆家・歌人の伊藤裕作様、中華人民共和国文化和旅游部・中国国家画院には、資料収集・人物照会・美術品照会において大いに御助力をいただき、また、本稿執筆にあたっては、法政大学名誉教授の飯田泰三先生より貴重なお意見をいただきました。ここに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

I express my sincere thanks to Tikotin's grandson Jaron Borensztajn for his generosity in providing scans of the material used in this essay.

衷心感谢中华人民共和国文化和旅游部・中国国家画院所提供的文献支持。

註

- 1) 戦前ハーグ期以前のティコティンについては、Patrizia Jirka-Schmitz, *Journal for Art Market Studies: The trade in Far Eastern art in Berlin during the Weimar Republic (1918-1933)*, Forum Kunst und Markt, Berlin 2018. などの先行研究がある。
- 2) Jaron Borensztajn, *Tikotin - a life devoted to Japanese Art (film)*, Ruth films, Jerusalem 2013. このドキュメンタリービデオには、ティコティンの生前を直接知る親族および知人の証言が記録されており、ティコティンが生前残した資料に基づいて、孫である Jaron Borensztajn も語り手として出演している。出生地と生年月日は、ハーグ資料館に保管されている住民票でも確認できる。本論において、以下、和訳はすべて筆者による。
- 3) ティコティンは 1926 年設立の東亜美術協会 (Die Gesellschaft für ostasiatische Kunst) 会員でもあり、顔が広がった。
- 4) Felix Tikotin, *Japanische Gespenster: mit sechzehn Abbildungen; erste Ausstellung April 1927*, Berlin 1927. 同カタログはルンプフ (Fritz Rumpf, 1888-1949) による。1927-28 年にはルンプフの訪日に同行した。
- 5) Maui Shinbun / 馬哇新聞 1931 年 3 月 18 日 第 1 面。この他、同紙によると、ティコティンは 1930 年 11 月末頃、当時のベルリンに存在した Haus Vaterland という、映画館や飲食店が集う施設内に日本式のバーを開業して灘の菊正などの日本酒も提供し、在独邦人から大いに喜ばれていたという。なお、同紙によれば、この年にベルリンの店が開店し、その準備のため前年ティコティンが訪日したとされているが、前掲の註 4 のカタログでは、「1927 年 4 月、初の日本美術展をもって画廊の開店を迎えた」とされている。
- 6) ティコティン日本コレクションによる美術展は、1933 年 1 月から 2 月にかけてはコペンハーゲン、同年 6 月 20 日から 7 月 15 日にかけてはアムステルダムで開催された。カタログは一部キュンメル (Otto Kümmel, 1874-1952) やルンプフによる。Patricia Jirka-Schmitz, *Ostasiatische Zeitschrift, Neue Serie; Nr. 22 - Herbst: Ausstellungen bei Tikotin Von 1927 bis 1932*, Deutsche Gesellschaft für Ostasiatische Kunst e.V. (Hrsg.) Berlin 2011, S.31-32. なお、ベルリンの東亜美術協会の中心的メンバーでもあったキュンメルはナチスが政権獲得した 1933 年 5 月に入党し、ゲッベルス (Joseph Goebbels, 1897-1945) の依頼で彼が作成した「キュ

ンメル報告書」によって、ドイツ起源とされる美術品や文化財の「奪還」が実行された。それゆえ、キュンメルは東洋美術研究の第一人者としてよりも、ナチスによる美術品掠奪計画の協力者として歴史資料に名を残すことになった（安松みゆき『ナチス・ドイツと（帝国）日本美術—歴史から消された展覧会』吉川弘文館、2016年、25-27頁）。一方、キュンメルと共に1912年の *Ostasiatische Zeitschrift*（『東亜雑誌』）創刊に携わり、当初は東亜美術協会の理事でもあったコーン（William Cohn, 1880-1961）は、ユダヤ系であったことから、1933年のナチス台頭と同時に東亜美術協会の理事から外され、その後は英国に亡命している（Hartmut Walravens, *Ostasiatische Zeitschrift 1912-1943 - Mitteilungen Der Gesellschaft Fur Ostasiatische Kunst 1926-1943: Bibliographie Und Register*, Harrassowitz Verlag, Wiesbaden 2000, Vorwort XII.）。コーンと親しかったティコティンも同年にベルリンを離れてオランダに移っている。キュンメルと、ティコティンやコーンをはじめとするユダヤ系の日本美術関係者との交流についてはまた別の機会の研究テーマとしたい。関連して、註37でも触れたように、ティコティンのベルリン期より以前のドイツにおける日本美術コレクションの形成にはキュンメルやグロッセ（Ernst Grosse, 1862-1927）他による貢献が大きいが、これについても別の機会に論じたい。

- 7) 住民票の記載から、従前の居住地はアムステルダムであった。
- 8) 占領後、オランダ紙のいくつかは発行が禁じられるか方向性をナチ化させられた。ユダヤ系であったティコティンが名を伏せてコレクションを提供した美術展もあったかもしれない。
- 9) Stephanie Robertson, *NATIONAL LIFE STORIES: Living Memory of the Jewish Community, Interviewed by Laraine Salamon*, reference C410/058 © The British Library, 1989.
- 10) Robertson 1989: interview summary sheet p.6.
- 11) Robertson 1989: interview summary sheet p.7.
- 12) De Rijnbode, 11.11.1949, p.2. 開戦後、ハーグからAlphen aan den Rijnに転居したことはティコティン本人も言及している。Felix Tikotin, „Erinnerungen eines Sammlers“, Hartmut Walravens, Hrsg., *Du verstehst unsere Herzen gut : Fritz Rumpf (1888-1949) im Spannungsfeld der deutsch-japanischen Kulturbeziehungen*, Japanisch-Deutsches Zentrum, Weinheim : VCH, Acta Humaniora, 1989, S. 121. なお、このティコティン自身による短い自伝 „Erinnerungen eines Sammlers“ が最初にフランス語で出版されたのは生前の1982年（Jean-Michel Gard, *Art japonais : l'art japonais dans les collections suisses*, Fondation Pierre Gianadda, Martigny 1982.）であり、ティコティンの死後、1989年に出版されたものはHartmut Walravensによる独語訳である。
- 13) Borensztajn 2013: 20:41.
- 14) Borensztajn 2013: 21:02.
- 15) Robertson 1989: interview summary sheet p.8.
- 16) Borensztajn 2013: 19:22.
- 17) 筆者によるインタビュー：有田清堂、東京都、2019年12月28日。
- 18) 岡村辰雄『如是多聞』岡村多聞堂、1982年、48頁。
- 19) 同上、50頁。
- 20) 前掲、原清堂、2019年。
- 21) “Nippon Astaire”『日米新聞』〔The Japanese-American News〕1936年2月7日英字版、2面。
- 22) 矢代幸雄『日本美術の恩人たち』文芸春秋新社、1961年、237頁。
- 23) 同上、237頁。

- 24) 写真3の切り抜きの同紙面に確認できる他の報道から判断して、少なくとも1937年11月下旬～12月初頭に発行されたものとわかるが、新聞社を明らかにできなかった。当時、一民間人が海外渡航の査証を得るのは非常に難しかったといい、査証の取得にあたって河上丈太郎の助力があったとされる（前掲、原清曠堂、2019年）。
- 25) 『博物館研究』日本博物館協会、1938年1月号、8頁。
- 26) 『読売新聞』1939年4月9日、7面。「昨年3月31日」に出発とある。当時の日本郵船の配船表から、欧州航路で該当するのはロンドン行の白山丸のみ。ハーグ資料館の住民票の記載から、住民登録が為されたのは1938年5月30日である。
- 27) 栗田丸は貨物船であり通常は一般客を乗せないが、開戦間際の邦人緊急避難で駆り出されていた。その後はイベリア半島を回り、ジブラルタル海峡を経てスエズ運河に入り、ポートサイド、シンガポール、大連、神戸を経て10月17日に横浜に帰着した（『日本郵船株式会社配船表』昭和14年版）。
- 28) 「昭和14年9月2日から昭和14年9月3日」『欧米政情一般報告関係雑纂 第五巻』外務省外交史料館。順造によれば、「ハーグからアントワープ港へ逃げる時に見た、オランダとベルギーの国境でさえダイナマイトが仕掛けられていた」という（『読売新聞』1939年11月12日 夕刊、1面）。
- 29) Het Vaderland : staat- en letterkundig nieuwsblad: Avondblad-B, 12. 08. 1939, p.1. 以下、ティコティンアートギャラリー展示に関するオランダ紙の出典は末尾の一覧を参照されたい。
- 30) B. Modderman, *Oude Japansche prentkunst(catalogus)*, Gemeente-Museum, 's-Gravenhage 1938.
- 31) De Maasbode: Avondblad, Tweede blad, 27. 10. 1938, p.6.
- 32) この錦絵は現在ボストン美術館に一点あり、作品名は同館による。
- 33) Robertson 1989: interview summary sheet p.4.
- 34) Robertson 1989: interview summary sheet p.5.
- 35) 同時期の新聞広告欄には、このアパートの賃貸情報が日々掲載されている。
- 36) Robertson 1989: interview summary sheet p.6.
- 37) 大塚工芸社刊『桃山花見屏風』大塚巧藝社、1938年。なお、この屏風は少なくとも1933年1月時点でティコティンの所有物であった（Fritz Rumpf og Otto Kümmel, *Japansk Kunst og Kunsthåndværk : Samlingen Tikotin. Udstillet i det danske Kunstindustrimuseum. Januar-Februar 1933*, Petersen, København 1933.）が、ティコティンの手に渡る前は、ドイツの民族学者であり東洋美術収集の先駆者でもあったグロッセの所有であった（*Algemeen Handelsblad: Avondblad*, 26. 10. 1935, p.9.）。グロッセがティコティンに与えた影響については、今後の研究課題としたい。
- 38) *Nieuwsblad van het Noorden*, 21. 02. 1940, p.15., *Algemeen Handelsblad: Avondblad*, 04. 12. 1940, p.5.
- 39) *Utrechtsch nieuwsblad*, 16. 12. 1940, p.3. 会場となった *Kunstliefde* の会長である Berend Modderman (1870-1944) は、1937年にオランダの美術コレクターと画商によって設立された *Vereeniging voor Japansche grafiek en kleinkunst* (現・The Society for Japanese Arts) の初代会長でもあり、ティコティンがハーグに移った当初より各美術展を通して交流のあった人物である。
- 40) 矢代、前掲書、240頁。
- 41) 各々の花に込められた意味で想いを伝えようとする行動は、少なくとも18世紀から存在したとされ、19世紀後半には、各花の意味を掲載した辞典がロンドンで出版されている。Kate Greenaway / Edmund Evans: *Language of Flowers*, London: George Routledge and Sons, 1884.

- 42) 記事中の、日本版画展を見学した Edzard Johan Modderman (1902-1975) は、前述の Berend Modderman の息子。
- 43) 『読売新聞』1939 年 10 月 26 日、5 面。
- 44) Tikotin 1989: 121.
- 45) 矢代、前掲書、238 頁。
- 46) 同上、239 頁。
- 47) 表具師によっては手掛けた仕事に自分の印を入れる場合もあるが、一般的ではない。また、たとえ入れてあっても作品の表面に見える部分ではなく、再度修繕が必要になった場合に作品を解体しなければ確認できない（前掲、原清曠堂、2019 年）。
- 48) たとえば、戦後、イスラエルに建設されたティコティン日本美術館の初代館長を務めた山田智三郎の証言がある。「なまなかの日本通」であったティコティンの強いこだわりにより、「日本と同じく、通風が一番良い保存方法だ」という理由でガラス戸のない紙障子だけの仕様になっているのは、美術品保存の責任者として「頭痛の種」であった。現地の通年の湿度変化を入念に調査していた山田は、陳列品を守るためガラス戸の重要性を主張したが、「自分の思う通りの建物が出来なければコレクションを持って帰る」というティコティンとは衝突が絶えなかったという（山田智三郎「イスラエル日本美術館・始末記」『藝術新潮』第 11 巻 第 8 号、新潮社、1960 年 8 月、137-142 頁。）。
- 49) 岡村、前掲書、50-51 頁。
- 50) 同上、52-55 頁。
- 51) たとえば、和食板前や寿司職人である。同じ料理人でも、フレンチやイタリアンのシェフ、あるいはファーストフードやカフェの厨房スタッフのような場合は EU 圏国籍保持者から人材確保が可能であり、それらの職に日本人が就くことは現地人の雇用枠を奪うことになるため、それで就労許可を得るのは事実上不可能である。
- 52) 中国国家画院『中国美術報』第 118 期、中华人民共和国文化和旅游部、2018 年 8 月、25 頁。
- 53) Tikotin 1989: 121.
- 54) Tikotin 1989: 121. 開館当初は、ガラス戸はなく日本式の障子戸が設置されていることが現地紙でも報道されている。参照：Haaretz / 1960. 05. 26, פאקס, p.2.
- 55) Maariv / 1957. 08. 27, מעריב, p.3.,（前掲、原清曠堂、2019 年）開館直後の現地紙にも「美術品の修復作業を現地人に教授するため、日本から専門家が招かれる予定」とあるが、私見ではこの企画は実現していない（Davar / 1960. 05. 26, דבר, p.4.）。
- 56) 前掲、原清曠堂、2019 年。
- 57) 戦後、原清曠は大英博物館やネルソン・アトキンス美術館収蔵品の修繕にもあたり、フリーア美術館からは招聘の話があったが、老齢を理由に辞退した（岡村、前掲書、217 頁）。
- 58) 同上、218 頁。
- 59) Borensztajn 2013: 16:17.
- 60) 『國華』第 1021 号 特集：チコチン旧蔵浮世絵版画、國華社・朝日新聞社、1979 年 3 月、21 頁。

参考文献・論文

- Felix Tikotin, *Japanische Gespenster: mit sechzehn Abbildungen ; erste Ausstellung April 1927*, Berlin 1927.
- Fritz Rumpf og Otto Kümmel, *Japansk Kunst og Kunsthandaaværk : Samlingen Tikotin. Udstillet i det danske Kunstindustrimuseum. Januar-Februar 1933*,

- Petersen, København 1933.
『博物館研究』日本博物館協会、1938年1月号。
B. Modderman, *Oude Japansche prentkunst (catalogus)*, Gemeente-Museum, 's-Gravenhage 1938.
大塚工藝社刊『桃花花見屏風』大塚巧藝社、1938年。
「昭和14年9月2日から昭和14年9月3日」『欧米政情一般報告関係雑纂 第五巻』外務省外交史料館。
『日本郵船株式会社配船表』昭和14年版。
『藝術新潮』第11巻 第8号、新潮社、1960年8月。
矢代幸雄『日本美術の恩人たち』文芸春秋新社、1961年。
『國華』第1021号 特集：チコチン旧蔵浮世絵版画、國華社・朝日新聞社、1979年3月。
岡村辰雄『如是多聞』岡村多聞堂、1982年。
Hartmut Walravens, Hrsg., *Du verstehst unsere Herzen gut: Fritz Rumpff (1888-1949) im Spannungsfeld der deutsch-japanischen Kulturbeziehungen*, Japanisch-Deutsches Zentrum, Weinheim: VCH, Acta Humaniora, 1989.
Stephanie Robertson, *NATIONAL LIFE STORIES: Living Memory of the Jewish Community, Interviewed by Laraine Salamon*, reference C410/058 © The British Library, 1989.
Hartmut Walravens, *Ostasiatische Zeitschrift 1912-1943 - Mitteilungen Der Gesellschaft Fur Ostasiatische Kunst 1926-1943: Bibliographie Und Register*, Harrassowitz Verlag, Wiesbaden 2000.
Patricia Jirka-Schmitz, *Ostasiatische Zeitschrift, Neue Serie; Nr. 22 - Herbst: Ausstellungen bei Tikotin Von 1927 bis 1932*, Deutsche Gesellschaft für Ostasiatische Kunst e.V. (Hrsg.) Berlin 2011.
Jaron Borensztajn, *Tikotin - a life devoted to Japanese Art (film)*, Ruth films, Jerusalem 2013.
安松みゆき『ナチス・ドイツと(帝国)日本美術—歴史から消された展覧会』吉川弘文館、2016年。
Patrizia Jirka-Schmitz, *Journal for Art Market Studies: The trade in Far Eastern art in Berlin during the Weimar Republic (1918-1933)*, Forum Kunst und Markt, Berlin 2018.
『中国美术报』第118期、中国国家画院、中华人民共和国文化和旅游部、2018年8月。

オランダ紙報道一覧

新聞社表記：Het Vaderland: staat -en letterkundig nieuwsblad: HV, De Maasbode: DM, Haagsche courant: HC, Algemeen Handelsblad: AH, De standaard: DS, De Telegraaf: DT, Arnheemsche courant: AC, Leidsche Courant: LC, Nieuwe Leidsche Courant: NLC, De residentiebode: DR, Nieuwsblad van het Noorden: NN, Nieuwe provinciale Groninger courant: NG, Utrechtsch Nieuwsblad: UN, Utrechts volksblad: sociaal-democratisch dagblad: UV, Dagblad voor Amersfoort: DA
開催地表記：Nassauplein 6: Np6, Gemeente-museum: GM, Rotterdamschen Kunstkring: RK, Rijksmuseum voor Volkskunst te Leiden: RL, Pictura (Groningen): P, Westerveld: W, Kunstliefde (Nobelstraat 12): KL, Muurhuizen te Amersfoort: MA

【広告】：新聞の美術展告知欄中の簡潔な広告 【独立広告】：独立した見出しのある広告

掲載内容／展示名称	開催日時	所	新聞社	新聞発行年月日
【広告】 Tikotin 東洋美術常設展 (中国・日本)	火 - 金 10-17 時	Np6	HV	1937.10/26, 27, 29, 11/2, 4, 5

掲載内容／展示名称	開催日時	所	新聞社	新聞発行年月日
【独立予告】葛飾北斎	1937.11/9	Np6	HV	1937.11/8
【独立予告】葛飾北斎		Np6	DM	1937.11/9
【広告】葛飾北斎	1937.11/30 迄	Np6	DM	1937.11/9-13, 16, 17, 19-21, 23, 25-28, 30
【広告】葛飾北斎	火 - 金 10-17 時	Np6	HV	1937. 11/9, 10
【広告】Tikotin 東洋美術常設展 (中国・日本)	火 - 金 10-17 時	Np6	HV	1937.11/13, 18, 20, 28, 30, 12/1-4, 7, 9-11
【評論】葛飾北斎		Np6	HV	1937.11/25
【広告】竹内栖鳳による掛物	12/14-31 迄	Np6	DM	1937.12/12, 14-19, 21-25, 28, 29, 31
【広告】竹内栖鳳	火 - 金 10-17 時	Np6	HV	1937.12/12, 16, 18, 19, 23, 24, 31, 1938.1/1, 8, 9
【独立広告】相阿弥・森狙仙・狩野芳崖ほか名匠の掛物	1938.1/21 迄	Np6	DM, HC	1938.1/11
浮世絵学派の巨匠による木版画 および絵画	1938.1/25-2/25	GM	DM, HC	1938.1/11
【独立広告】相阿弥・森狙仙・狩野芳崖ほか名匠の掛物	1938.1/21 迄	Np6	AH	1938.1/12
浮世絵学派の巨匠による木版画 および絵画	1938.1/25-2/25	GM	AH	1938.1/12, 23
【広告】相阿弥・森狙仙・狩野芳崖ほか名匠による掛物	火 - 金 10-17 時	Np6	HV	1938.1/12-15, 18, 21
【評論】Tikotin アートギャラリー：西洋美術との比較－日本美術と中国美術			HV	1938.1/17
【紹介記事】於ハーグ市博物館・日本浮世絵版画	1938.3/6 迄	GM	DM	1938.1/22
【評論】日本浮世絵版画		GM	HC	1938.1/22
【評論】日本浮世絵版画		GM	HV	1938.1/22
【主に紹介】展覧会オープニング：日本浮世絵版画		GM	HV	1938.1/23
【評論】日本浮世絵版画		GM	HC, DS	1938.1/24
【美術展広告】名匠による絵画と浮世絵版画	1938.2/25 迄	Np6	DM	1938.1/25-30, 2/1, 2, 4, 6, 8, 9, 11, 15-20, 22, 23, 25
【美術展広告】名匠による絵画と浮世絵版画	火 - 金 10-17 時 2/25 迄	Np6	HV	1938.1/25, 29, 30, 2/2, 4-6, 8, 11, 13, 15-20, 22, 25
【評論】日本浮世絵版画		GM	DT	1938.1/29
【美術展広告】名匠による絵画と浮世絵版画	火 - 金 10-17 時 2/25 迄	Np6	HC	1938.2/9, 15, 19
【評論】鈴木春信・鳥居清長		GM	HV	1938.2/22
【広告】Tikotin 東洋美術常設展 (中国・日本)	火 - 金 10-17 時	Np6	HV	1938.2/26, 27, 3/1
【広告】日本庭園と生け花	1938.3/1-3/5	Np6	AH	1938.2/28
【広告】日本庭園と生け花	1938.3/1-3/5	Np6	HV	1938.2/28, 3/4
【広告】日本庭園と生け花	1938.3/1-3/5	Np6	DM	1938.3/1-5
【広告】日本庭園と生け花	1938.3/5 迄	Np6	HC	1938.3/2
【評論】日本庭園と生け花		Np6	HV	1938.3/2

掲載内容／展示名称	開催日時	所	新聞社	新聞発行年月日
【広告】 Tikotin 東洋美術常設展 (中国・日本)	火 - 金 10-17 時	Np6	HV	1938.3/6, 9, 10, 16, 18-20, 22-24, 29, 31, 4/2, 6, 9, 10, 12, 14, 15, 17, 20, 26, 28, 30, 5/1, 3-5
【評論】 日本浮世絵版画：写楽／歌麿		GM	HV	1938.3/7
【紹介】 日本浮世絵版画	1938.4/2-5/7	GM	AC	1938.3/25
【広告】 絵ごよみ	5/18-6/17	Np6	AH	1938.5/16
【広告】 絵ごよみ	5/18-6/17	Np6	HC	1938.5/17, 30, 6/3, 10
【紹介】 絵ごよみ	5/18-6/17	Np6	HC	1938.5/17
【広告】 絵ごよみ	火 - 金 10-17 時 6/17 迄	Np6	HV	1938.5/17, 21, 22, 25, 26, 28, 29, 6/1, 3-5, 8, 11, 12
【広告】 絵ごよみ	5/18-6/17	Np6	DM	1938.5/18, 19, 21, 22, 24-26, 28, 29, 31, 6/1-5, 8-12, 14, 15
【評論】 絵ごよみ I		Np6	HV	1938.6/9
【評論】 絵ごよみ II		Np6	HV	1938.6/10
【独立予告】 新入荷：日本画・木版画	6/28-7/15	Np6	HV	1938.6/25
【広告】 新入荷：日本画・木版画	火 - 金 13-17 時 7/15 迄	Np6	HV	1938.6/28, 30, 7/2, 5-7, 9, 12, 14, 15
【広告】 Tikotin 東洋美術常設展 (中国・日本)	火 - 金 10-17 時	Np6	HV	1938.7/22-24, 27, 29, 31, 8/2, 4, 5, 7, 11-13, 16, 18, 21, 23, 25, 26, 28, 30
【広告】 日本美術のなかのオランダ人ほか欧州人	9/30 迄	Np6	DM	1938.8/31, 9/1-4, 6-11, 13-18, 20-25, 27-29
【独立広告】 日本美術のなかのオランダ人ほか欧州人	9/30 迄	Np6	DM	1938.9/1
【広告】 日本美術のなかのオランダ人ほか欧州人	9/30 迄	Np6	HV	1938.9/1, 2, 6-10, 13-18
【評論】 日本美術のなかのオランダ人ほか欧州人		Np6	HV	1938.9/23
【広告】 日本美術のなかのオランダ人ほか欧州人	10/5 迄	Np6	HV	1938.10/1, 2, 4
【紹介】 歌川国芳	11/25 迄	Np6	HC	1938.10/25
【独立広告】 歌川国芳	11/25 迄	Np6	HV	1938.10/25
【広告】 歌川国芳	11/25 迄	Np6	HV	1938.10/25, 26, 29, 30, 11/2, 4-6, 8-12, 16, 18-21
【広告】 歌川国芳	11/25 迄	Np6	DM	1938.10/27-30, 11/1-6, 8-13, 15-20, 22-24
【独立広告】 歌川国芳	11/25 迄	Np6	DM	1938.10/27
【広告】 歌川国芳	11/25 迄	Np6	HC	1938.11/9
【独立予告】 Tikotin コレクション・掛物（複製）と陶器	11/20-12/11	RK	HV	1938.11/18
【独立予告】 Tikotin コレクション・掛物（複製）と陶器	11/20-12/11	RK	DM	1938.11/19
【評論】 歌川国芳		Np6	HV	1938.11/21
【広告】 Tikotin コレクション展	12/10 迄	RK	DM	1938.11/30, 12/1-4, 7-9
【独立予告】 根付と屏風	1939.4/25-5/31	Np6	HV	1939.4/22
【独立予告】 根付と屏風	1939.5/31 迄	Np6	HC	1939.4/25

掲載内容／展示名称	開催日時	所	新聞社	新聞発行年月日
【広告】根付と屏風	1939.4/25-5/31	Np6	AH	1939.4/25
【広告】根付と屏風	火 - 金 13-17 時 5/31 迄	Np6	HV	1939.4/25-27, 29, 30, 5/2, 4-7, 12, 14, 17, 20, 23, 26-28
【広告】根付と屏風	5/31 迄	Np6	DM	1939.4/26-30, 5/2-7, 9-14, 16- 18, 20, 23-28, 31
【評論】根付と屏風		Np6	HC	1939.5/20
【広告】根付と屏風	火 - 金 13-17 時 5/31 迄	Np6	HC	1939.5/22, 23
【評論】根付と屏風		Np6	HV	1939.5/26
【評論】根付について			AH	1939.7/7
【独立記事】版画（北溪、岳亭、 豊国、国貞）		RL	DM, HV, LC, NLC	1939.7/11
【独立広告】齊白石	1939.8/1-9/1	Np6	HC	1939.7/25
【広告】齊白石	1939.8/1-9/1	Np6	AH	1939.7/25
【広告】齊白石	8/31 迄	Np6	DM	1939.7/27, 29, 30, 8/2-6, 8-13, 15-20, 22-27, 29-31
【広告】齊白石	火 - 金 13-17 時 8/1-9/1	Np6	HC	1939.7/29, 8/2, 3, 14, 22, 25
【広告】齊白石	火 - 金 10-17 時 9/5 迄	Np6	HV	1939.8/1-4, 6, 8, 10, 12, 13, 18, 19, 20, 22-27, 29, 30, 9/1-3
【評論】齊白石		Np6	HV	1939.8/12
【独立広告】河鍋曉斎	1939.9/29-11/3	Np6	HC, DM, HV	1939.9/28
【広告】河鍋曉斎	火 - 金 13-17 時 9/29-11/3	Np6	AH	1939.9/28
【広告】河鍋曉斎	1939.11/3 迄	Np6	DM	1939.9/30, 10/1, 3-7, 10-13, 15, 17-22, 24-29, 31, 11/1-3
【広告】河鍋曉斎	火 - 金 10-17 時 11/3 迄	Np6	HV	1939.9/30, 10/1, 3, 5, 6, 8, 10- 13, 15, 17, 18, 20, 22, 24, 28
【広告】河鍋曉斎	火 - 金 13-17 時 11/3 迄	Np6	HC	1939.10/9, 13, 14, 11/1
【評論】河鍋曉斎		Np6	HV	1939.10/12
【独立予告】生地・染物・刺繍	1939.11/21-12/29	Np6	HV	1939.11/20
【独立予告】生地・染物・刺繍	1939.11/21-12/29	Np6	DM	1939.11/21
【広告】生地・染物・刺繍	1939.12/29 迄	Np6	DM	1939.11/21-26, 28-30, 12/1-3, 5-10, 12-17, 20-24, 26, 28, 29
【広告】生地・染物・刺繍	火 - 金 10-17 時 12/29 迄	Np6	HV	1939.11/21-24, 26, 28, 29, 12/1, 7-10, 14, 16, 17, 24, 26, 28
【広告】生地・染物・刺繍	火 - 金 10-17 時 12/29 迄	Np6	DR	1939.11/22, 24, 25, 28-30, 12/1, 2, 4-9, 12, 16, 20, 23, 27, 29, 30
【評論】茶器展		GM	DM	1939.12/6
【評論】生地・染物・刺繍		Np6	HV	1939.12/14

掲載内容／展示名称	開催日時	所	新聞社	新聞発行年月日
【広告】和書・和紙	火 - 金 13-17 時 3/1 迄	Np6	AH	1940.1/18, 20, 23, 24, 26-28, 2/1, 2, 4, 7-11, 13-17, 20-23, 25, 28
【広告】和書・和紙	1940.3/1 迄	Np6	DM	1940.1/18-20, 27, 31, 2/1-4, 10, 13, 14, 17, 18
【広告】和書・和紙	火 - 金 13-17 時 3/1 迄	Np6	HV	1940.1/18-21, 23-26, 2/2, 8, 17, 23, 25, 27
【広告】和書・和紙	火 - 金 13-17 時 3/1 迄	Np6	DR	1940.1/19, 22, 23, 26, 27, 29, 2/1-3, 6, 7, 9, 14-16, 19, 20, 23, 24, 26, 27, 3/2, 4, 5
【評論】和書・和紙 I		Np6	HV	1940.2/9
【評論】和書・和紙 II		Np6	HV	1940.2/10
【独立広告】Pictura 美術展		P	NN	1940.2/16
【予告】サブライズ企画	2/19 (月) 15:15	W	HV	1940.2/16
【広告】日本美術展	2/18-3/3 11- 16:30	P	NN	1940.2/17, 19-23, 26-28, 3/1
【広告】Pictura 美術展	2/18-3/3 11- 16:30	P	NN	1940.2/17, 22, 27
【広告】Pictura 美術展	2/18-3/3 11- 16:30	P	NG	1940.2/17, 24
【評論】Pictura 美術展		P	NN	1940.2/21
【広告】日本の陶磁器・茶器	火 - 金 13-17 時 4/11-6/7	Np6	AH	1940.4/9-12, 14, 16, 17, 19, 23-28, 30, 5/1, 2, 4, 5, 7-9, 12, 18, 19, 22, 23, 25, 28, 30, 6/1, 4, 7, 11, 13
【独立広告】日本の陶磁器・茶器	1940. 4/11-6/7	Np6	HV	1940.4/9
【独立広告】日本の陶磁器・茶器	1940. 4/11-6/7	Np6	HC	1940.4/10
【広告】日本の陶磁器・茶器	火 - 金 13-17 時 6/7 迄	Np6	HV	1940.4/11, 13, 16, 17, 19, 20, 23, 26, 28, 30, 5/2, 5, 8, 9, 23- 26, 29, 30, 6/1, 2, 5
【広告】日本の陶磁器・茶器	火 - 金 13-17 時 6/7 迄	Np6	DR	1940.4/11, 12, 15, 16, 18-20, 22, 24, 5/1, 4, 6
【広告】日本の陶磁器・茶器	6/7 迄	Np6	DM	1940.4/13, 18, 30, 5/1, 5, 7-10
【広告】日本の陶磁器・茶器	火 - 金 13-17 時 6/7 迄	Np6	HC	1940.4/20
【独立広告】古典期後期中国と日本の 絵画	1940.9/6-10/4	Np6	HV	1940.9/3
【独立広告】古典期後期中国と日本の 絵画	1940.9/6-10/4	Np6	HC	1940.9/5
【広告】古典期後期中国と日本の 絵画	1940.10/5 迄	Np6	AH	1940.9/6-8, 10-12, 18-22, 24, 26-28, 10/1, 3, 4, 8
【広告】古典期後期中国と日本の 絵画	火 - 金 10-17 時 10/4 迄	Np6	HV	1940.9/6, 11, 18, 19, 21, 24-29, 10/1, 3, 4
【評論】古典期後期中国と日本の 絵画		Np6	DT	1940.9/13
【広告】古典期後期中国と日本の 絵画	火 - 金 10/4 迄	Np6	DM	1940.9/13, 25, 26, 28
【評論】古典期後期中国と日本の 絵画		Np6	HV	1940.9/20

掲載内容／展示名称	開催日時	所	新聞社	新聞発行年月日
【広告】Tikotin コレクション・大塚巧藝新社の巻物・掛物(複製)と小物美術品(石、青銅、木工)	11/17-12/1 11-16:30	P	NN	1940.11/16, 21, 27
【広告】Tikotin コレクション・大塚巧藝新社の巻物・掛物(複製)と小物美術品(石、青銅、木工)	11/17-12/1 11-16:30	P	NG	1940.11/16, 23
【独立紹介】Tikotin コレクション・大塚巧藝新社の巻物・掛物(複製)と小物美術品(石、青銅、木工)		P	NN	1940.11/18
【評論】Tikotin コレクション・大塚巧藝新社の巻物・掛物(複製)と小物美術品(石、青銅、木工)		P	NN	1940.11/25
【評論】Tikotin コレクション・大塚巧藝新社の巻物・掛物(複製)と小物美術品(石、青銅、木工)		P	AH	1940.12/4
【ガイドツアー告知】中国・日本古美術	12/18(水)14時半	KL	UN	1940.12/16
【紹介記事】中国・日本古美術		KL	UN	1940.12/16
【ガイドツアー告知】中国・日本古美術	水曜午後2時半	KL	UV	1940.12/17
【評論】中国・日本古美術		KL	UN	1940.12/28
【広告】中国・日本古美術	10-16 時	KL	UN	1940.12/16-18, 20, 21, 24, 28, 30, 31, 1941.1/2-4, 6-11, 13-15
【予告】中国古美術展	1947.5/10 より	MA	DA	1947.4/18

<ABSTRACT>

**Japanese art dealer Felix Tikotin and
Japanese mounter Junzo Hara:
Records in pre-war The Hague**

HORI Sakiko

This article focuses on the late pre-war Netherlands period of Japanese art dealer Felix Tikotin (1893-1986), - about three years from October 1937 to October 1940, when he was in The Hague. It clarifies his activities and achievements at his home art gallery. At the same time, the purpose is to shed light on the role and activity of Japanese mounter Junzo Hara (1913-1968), whom Tikotin invited to The Hague, and to clarify Junzo's achievements.

As a result of surveying Dutch newspapers, it was found that the Tikotin Art Gallery in The Hague held 16 art exhibitions in total over about three years. In addition, from press records it was found that Junzo was energetically practicing flower arrangement and the tea ceremony at Japanese art exhibitions in various parts of the Netherlands.

These gallery exhibitions conveyed a part of the Japanese view that art is rooted in people's lifestyle as a part of daily life, not as a creation separated from everyday life. In addition, through Tikotin's original exhibition "Dutch and other Europeans in Japanese Art", the appearance of Europeans drawn by Japanese artists gave a fresh surprise. As a result, it was possible to realize the intersection of both gazes, rather than the one-way Orientalising gaze from Europe.

Junzo was also involved in activities to disseminate Japanese culture in the Netherlands before the war. Especially for Ikebana, a number of outstanding works were shown by Junzo, who knew the form and color scheme of Japanese art as a mounter. This gave a part of the Japanese view

that Japanese people also have a culture of expressing and communicating their feelings with flowers, as the Dutch proverb says.

The art gallery seemed to be on track with Tikotin and Junzo. However, the influence of “Kristallnacht”, which started to push Jews in Germany into a corner, extended to Tikotin in The Hague, and the conclusion of the German-Soviet Non-Aggression Treaty made the start of the war inevitable, so Junzo was forced to return to Japan. Finally, the Nazi administration hunted down Jews after their invasion of the Netherlands, and Tikotin’s gallery closed at the same time as his evacuation from The Hague. The energy and fulfillment of these three years masked their political turbulence.